

第十回 齋藤茂吉短歌文学賞

佐佐木幸綱 『吞牛』

本阿弥書店

正賞・茂吉自筆色紙の織画
副賞・賞金百万円

選考委員

委員長 岡井 隆

委員 中村 稔

馬場あき子

前 登志夫

本 林勝夫

(五十音順)

佐佐木幸綱『呑牛』（自選十首）

受賞の言葉

佐佐木幸綱

酒の名を百知れるかと問うならば千告ぐべしとたれかこたえよ
「道」と書けば異族の首をひっさげて行き来せし日の男らの声
サッカーボールほどの暗闇に抱かれて柔らかかならめ雌雄の時間
ウイスキーは割らずにあお呷れ人は抱け月光は八月の裸身のために
生きるとは時間の川を抜き手きるひとりひとつの影と思ひぬ
去りゆくは季節、朝雲、夢、女、雄ごころは死まで旅のこころよ
啄木の白き足音、絵のなかのゴツホの靴の黒き足音
縄文人のごとく走れり葦切が葦切を呼ぶ朝空の下
フロッピーディスクに昼間閉じこめし銀のヤンマを呼び出す夕べ
大徳利のなかにて鯨を食って居る夜の男なりにけるかも

広島のホテルで、早朝、受賞を知らせる電話連絡をいただきました。前夜、雨の中を遅くまで友人たちと飲み歩いていましたので、連絡がとれなかったとのこと。二日酔いの頭を振りながら浴室に飛び込み、熱いシャワーを浴びながら受賞の喜びを感しました。母の話によると、私は小学校に入る前の幼い時期に、茂吉先生に頭を撫でられたことがあったとのこと。祖父信綱とのお縁が目にかかる機会があったようです。残念ならままったく記憶はありませんが、私にとってはかけがえないエピソードとして、ずっと大切に思ってきました。ヨーロッパで一年間暮らしたとき、アムステルダムでゴツホやウイーンのプリューゲルを見て、齋藤茂吉のヨーロッパにおける絵画体験について考え、二、三の新聞・雑誌に発表しました。ボンベイではヴェスヴィオ火山に登った茂吉を思う歌を作りました。

私の「旅人」「呑牛」は日付・日録入りの歌集です。これは茂吉の日付・日録入り歌集「遠遊」「遍歴」を意識したものでした。

シャワーを浴びながら、茂吉という偉大な先輩のすつと後を、このように歩いてきた自分をあらためて思いました。ありがとうございました。



第10回齋藤茂吉短歌文学賞受賞者略歴

佐佐木幸綱（ささき ゆきつな）

1938年、東京生まれ。早稲田大学文学部大学院修士修了。河出書房「文藝」編集長等を経て、現在、早稲田大学教授。

創刊101年を迎えた短歌雑誌「心の花」編集長。「朝日歌壇」「東京歌壇」「NHK歌壇」選者。現代歌人協会常任理事。

歌集に『群黎』（現代歌人協会賞）、『金色の獅子』（日本詩歌文学館賞）、『瀧の時間』（遼空賞）、『旅人』（若山牧水賞）など9冊。評論集に『柿本人麻呂ノート』『東歌』『作歌の現場』『佐佐木信綱』など。編著に『日本歌語辞典』『短歌名言辞典』など。

現在、河出書房新社から『佐佐木幸綱の世界』全16巻・別巻1巻を刊行中。

『呑牛』感想

岡井 隆

「歌壇」連載中から注目され、一部その行方をあやぶむ声もあったのだが、一年の荒行を完成された力量は瞠目すべきものがあつた。こういう仕事は、はじめ考えていたのと終わってみての感じと必ず違つていて、その日その月の遇然の材料を手でつかんで処理して行くのである。生涯にこういう機会は二度とないはずで、作者は、全身でそのことを表現しているように思える。おそらく若い歌人たちへの示唆も刺激も大きいものがある。

魅力的な人間像

中村 稔

佐佐木幸綱歌集『呑牛』は魅力に富んでいた。その魅力の一部は現代を代表す

る歌人の一人である作者の生活、プライ

ヴァシーにふれる興趣にあつた。歌壇の生息に疎い私には、その日常が短歌とその周辺を踏みだすことがほとんどみられないことが驚異であつた。パナマ大使館占領事件等の外界の事件に関心がないわけではないが、それらによって魂を揺すぶられることも、その衝撃が内面化されて造型されることもない。それが現代人の生活感情の率直な表現となつていることも魅力の一部だろう。しかも、この歌集から生き生きと作者の人間像が立ち上つてくるのが魅力の本質であり、それはまた作者のダイナミックな人間性の魅力だといいかえてもよい。

豪放と繊細の調和

馬場あき子

現代のような煩瑣な時代に、「日録」というエネルギーな作業とともに短歌

を存在させようという試みは、単に日々

の事がただけではない凝集した散文力と短歌力との日々の葛藤だつた。そのことが『呑牛』という一冊になつたのちはじめてわかつた。誰にでもできることではない。読み物として面白く楽しめた上、独立した一首としての冒険も多く、韻律との対決の場もある。従来の子歌日記ではなく、野心的な試みを日常風によそつて、さりげなく遂げているところが見事である。豪放好みの作者が、日録の中である時みせる細やかな心使いや、尖鋭な思いつきに、人間味豊かな個性がみえる。

破天荒な面白さ

前 登志夫

現代の歌人は凄い試みをするものだと驚嘆させられた。一年間の毎日の身辺の出来事や事件を、丹念に詞書として記録し、歌人の生活の現場において毎日作歌した。

和歌史上かつて誰もこころみなかつたことだ。『呑牛』成立の歌人の世界の破天荒な面白さはいうに及ばず、読者の側にとつてもその読みについて多くを験されている。たとえば、読みをふかめるにつれてしだいに日録としての詞書を透明にして、歌だけを疾走させてみる。

毎日の事件や記録から、歌が抽象され飛翔する混沌としたエネルギーに拍手する。一集にまとまった時、はじめて納得できた。

『呑牛』という雄々しい集名よろしく、榊莫山氏の題字もこの歌集にふさわしいものであつた。

短歌百年を背負う

本林 勝 夫

佐佐木幸綱はここ数年歌人として最も充実した時期にあり、あたかも枝葉を繁らせ始めた大樹の感がある。『呑牛』はそうした一年の日々をもれなく書き続けた一巻にまとめたもの。この種の試みは従来の歌集・句集になかつたわけではない。しかし、それぞれに日録ふうの詞書を付し、歌と微妙に照応しながら「現在」に生きる歌人の生の軌跡を示している点では類がない。

ことの大小を問わず、われわれはいま自己を埋没しかねないような情報の氾濫する社会に生きている。そういうなかにあつて何をうたうのか、どこに作歌の意義を見出すのか。

『呑牛』は詞書を含めて、その「作歌の現場」をリアルタイムで記録し、うたつて、私たちの前に提示している。さわだたないようだが、本書には日々の出来

事に即しながら時代や人間の批評もあり、また現時点での過去の思い出、とくに人の死や忌日を機とした歌も多い。しかしそれらが低湿に墮さないのは「朝の思想」で書かれ、時の流れを抜き手をきって生きるその態度によるものであろう。短歌の歴史百年を背負つて行くとする歌人の志がそこにある。

これまでの受賞者

- 第一回 岡井 隆 『親和力』 砂子屋書房
第二回 本林勝夫 『齋藤茂吉の研究―その生と表現―』 桜楓社
第三回 塚本邦雄 『黄金律』 花曜社
第四回 前 登志夫 『鳥獸蟲魚』 小澤書店
第五回 齋藤 史 『秋天瑠璃』 不識書院
第六回 近藤芳美 『希求』 砂子屋書房
第七回 小暮政次 『暫紅新集』 短歌新聞社
第八回 馬場あき子 『飛種』 短歌研究社
第九回 吉田 漱 『「白き山」全注釈』 短歌新聞社

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

千九〇八五七〇
山形市松波二丁目八一― 山形県文化環境部文化振興課内
TEL 〇三三―六三〇―二三〇六